

児童図書館員養成専門講座へのお誘い★1

児童図書館員養成専門講座 あなたの熱意が伝わるレポートを JLA児童青少年委員会

あなたは、今どこでこのページを開いているでしょうか？ 職場の机の上で？ あるいは、自宅のテーブルを前にして？

いずれにしろ、『図書館雑誌』を手に入れているのですから、図書館の仕事がされている方が多いと思います。

なぜ、このページが気になるのでしょうか。たまたま行政の異動で図書館に来て、仕事に必要ならと司書の資格を取ってはみたものの、これから行政としてやりがいのある仕事を続けていくには、図書館で児童サービスを続けるべきかどうか迷っていませんか？ あるいは、図書館が好きで、市役所の試験を受けても合格しないので、仕方なく嘱託で働いているが、好きな児童サービスに情熱を注ぐにはどうしたらいいものかと迷っていませんか？

公共図書館の児童サービスは、すべての図書館サービスの基礎となるべきサービスです。特に、子どもと本とを結びつけるサービスは短大や大学などの司書課程だけでは勉強しきれないものが多々あります。それでも、現場で頑張ってきたあなたが、もう一つ開けた視野で物を見、考え、児童サービスを発展させるための手がかりを得るような機会を提供したいと、児童青少年委員会は考えています。

公共図書館の児童サービスはそれだけの努力をする価値のある仕事だからこそ、そう考えるのです。

応募について

そこで、あなたは考えます。ひと

つ、児童図書館員養成専門講座（以下、「講座」）に応募してみようかと。

しかし、前期6日間、後期9日間のおよそ2週間、職場を空けるということが可能でしょうか？ よく、考えてみてください。あなたのいない間、仕事はどのようにまわせばいいのでしょうか？ 誰かが支えてくれますか？ そうです。早くあなたを送り出してくれる環境を調べられる能力を持っているあなたにこそ、講座を受講していただきたい。それは同時に講座を受講した成果を職場の仲間や図書館ボランティアの方々に還元して、あなたの勤めている図書館の児童サービスを発展させていく可能性があるからです。

そして、何よりも児童サービスを発展させる力を高めたいという、あなたの決意を見せていただきたい。

講座応募に際し、ハリエット・G. ロングの『児童図書館への道』を課題本としてあげていますが、講座はすでにここから始まっています。絶版となってなかなか読むことのできない本ですが、現場の体験に裏打ちされた発言は、今でも我々に示唆を与えてくれます。つまり、この講座に応募するだけでも、仕事を見直すきっかけにつながります。

講座応募原稿では、あなたご自身の課題とあなたの勤務館における児童サービスの課題を分けて考えてください。かなり重なるとは思いますが、同じではありません。そして、講座受講の必要性を明確に述べてください。公費で応募するにしても、児童サービスの担い手を継続的に養

成していくという必要性があるはずですよ。

受講にあたって

講座では、講師から非常に多くの課題が出ます。特に、後期の課題は、取り組まなければならない時期が仕事の繁忙期と重なります。計画的に取り組まれるよう、ご注意ください。

講座への応募原稿、課題レポート共にですが、提出に際しては、仕上がったと思って安心せずに、必ず読み返す習慣をつけてください。さらに細かいことを申し上げると、用字用語の統一、同意語の繰り返し、適切な段落替え、指示代名詞の多用を避けること、語句の変換ミスなどにご注意を。求められた字数を守ることは言うまでもありません。

どんなレポートにも言えることですが、どこかに書いてあることを引用するのではなく、自らの頭で考えたことを書く。発見し、論証することが大切です。考えることができれば、講座を修了しても学ぶことができます。

さて、講座受講中は全国から集まった受講生と触れ合うことができます。志を同じくする人とのつながりは貴重です。同時に、職場における人とのつながりの大切さにも思い至ることでしょう。あなたの応募をお待ちしています。

[NDC10: 01628

BSH: 1. 児童図書館 2. 研修(図書館員)]

児童図書館員養成専門講座へのお誘い★2

乳幼児サービスの実務を と一緒に学びませんか？

島本まり子

乳幼児サービスが児童図書館員養成専門講座のプログラムに入ったのは2001年からで、早くも17年がたちます。当初半日だった講座は1日の講座になりました。私は2008年から担当させていただいています。近年は子育て支援の意味合いもあって、全国の多くの図書館で乳幼児と保護者への理解が進み、施設が整備され、いろいろなサービスが実施されるようになってきていると感じています。

私の講座は実務的な内容で、受講生の皆さんの課題を元に、私が図書館の現場で子どもたちにサービスをした経験やこれまで得た知識を織り交ぜながら進めています。構成は、「1. 乳幼児サービスとは」、「2. 絵本を知る・選ぶ」、「3. おはなし会について」、「4. おはなし会のプログラムについて」の4部です。事前の課題は、乳幼児を対象とした①施設や設備があるか、②事業や行事を実施しているか、③絵本を選ぶときどういうことに気を付けているか、選書基準があるか、④0歳、1～2歳、3～4歳、5～6歳の各年齢に司書として絶対にお薦めしたい絵本を2冊ずつ挙げる、⑤1～2歳向けのおはなし会のプログラムを立てる、というものです。他の講座の課題より簡単という声も聞かれますが、課題に取り組むことによってどれだけ自分が乳幼児と保護者に向き合っているか、乳幼児サービスを理解しているかに気づいてもらうのがねらいです。実際のところ、課題の

回答によって各図書館の乳幼児サービスの状況や受講生の取り組み姿勢等を知ることができ、講座の資料として大いに役立っています。

講座の詳しい内容ですが、「1」は乳幼児サービスの対象と内容についてです。図書館学のテキストには対象を限定して定義しているものもありますが、理論的にそれはそれとして、私は0歳から6歳までの乳幼児と保護者と幅広くとらえてお話ししています。子どもは個人差が大きく、成長も早く、きょうだいがいる場合もあるので、現場では乳児から幼児までを連続でとらえた上で各年齢に応じた本やサービスを提供できるようにできたらよいと考えています。乳幼児サービスの内容は、おはなし会やブックスタートだけでなく、ブックリストの作成や保育園への出前サービス、保護者向けの講座等も含めて考えます。ここで触れる課題①と②はただ単に施設や行事等の有無だけでなく、自館の現状を洗い出し、他館の事例を参考にして、施設や設備が整っていないければ機会を見て予算計上する、行事や事業は対象に応じて見直すなど今後の業務のきっかけになればと思っています。現状がどうしても変えられない場合は、乳幼児と保護者の視点に立ってソフト面でカバーすること、そういう「気づき」が大切であるともお話ししています。

「2」では、赤ちゃん絵本等の選書と乳幼児の成長と年齢に合った選び

方を、課題③と④の回答を参考にしながら進めています。選書基準や方針をこの機会に確認し、内容の検証や自分は選書できてでも担当が変わったときにちゃんと選べるのかといった問題に気づいてもらえればと思います。

「3」では、おはなし会の開催方法やプログラムの作り方、年齢に合ったわらべうたを紹介した後、「4」と課題⑤として、おはなし会のプログラムを一人分ずつ実演してもらいます。普段は読む立場なので、他の人に読んでもらう体験は新鮮で勉強になります。その地域ならではのわらべうたを聴いたり、同じ歌でも振りが違う手遊びを見ることもできて、毎回、全員で楽しんでいます。

今まで受講した方からは、他館の事業や行事の事例が参考になった、自館の選書基準を作成するのに他館の素晴らしい基準や方針を参考にできて良かった等の声がありました。

最後になりますが、当講座は児童サービスの知識や技術の研鑽の場であるとともに交流と情報交換の場でもあります。受講生は数週間苦楽を共にするためか、他の研修とは違う連帯感が生まれます。皆さんもぜひ講座にご参加いただき、他館の方と親睦を深めて仕事の幅を広げてください。

(しまもと まりこ：浦安市教育委員会)
[NDC10：015.91 BSH：1.乳児
2.幼児 3.研修(図書館員)]

児童図書館員養成専門講座へのお誘い★3

「図書館の魅せ方」

押樋良樹

押樋良樹 おおとりょうき
現業：図書館コミュニケーションデザイナー
デザインコンサルタント歴半世紀、図書館に関わって四十年超

児童室と児童図書館員の魅力…そのコミュニケーションデザインを考える講座です。

企業をはじめとするさまざまなブランドを世の中にどう伝えるかを仕事としてきた私が、大好きな図書館と図書館の魅力の核である図書館員の能力をどのように訴求するべきなのかをテーマにした講座です。

そして、この講座の目標は、「児童図書館大繁盛」です。現業のどこを押さえて、どのように訴求すれば良いのか！にお気づきいただけます。そして、ご自身の仕事にさらに誇りを持っていただき、利用者へ伝え上手になっていただきます。内容は例年若干異なりますが、以下の⑩の内容です。

その① まずは、冷静に利用者の目で、ご自分の図書館を発表してい

たきます。

時間制限5分程度で、ご自分の図書館紹介をスライドでプレゼンテーションを行っていただきます。時間内にきちんと伝えることも肝心です
その② あなたの存在が児童図書館であることを再認識。

その③ あなたの魅力・能力を伝えていないことを自覚していただきます。

何気なく前例に合わせて作成している、利用案内を見つめなおします。

その④ カウンター周辺は、プロらしく魅せる環境になっていますか？

その⑤ 壁いっぱいの装飾は、いつ新しいものに変えるのですか？

薄紙細工の可愛いお花があれば児童室でしょうか？目くらましは不要です。

その⑥ サインが一枚もない無い図書館が良い！

あなたがサイン、どんな要望にも応えられる魅惑の案内人です。

その⑦ 広報があなたに力を！魅力が伝わる掲示ポスターか？配布印刷物か？

今日初めて来館の方に伝えたい内容になっていますか？馴れ合いの文言ではありませんか？



その⑧ POP上手になりましょう！児童図書館にも社会の風を！

その⑨ 本を手渡せば、終わったと考えていませんか？接客と接客を考える。

その⑩ あなたの価値を知らせれば、子供たちは終身図書館ファン！

児童図書館担当であることの専門力を再認識いただき、ご自身が日本の図書館を支えるお役であることに、誇りと自信を持っていただく講座です。

(おおとりょうき：
図書館コミュニケーションデザイナー)
[NDC10：0137

BSH：1.PR 2.児童図書館]

児童図書館員養成専門講座へのお誘い★4

「声」の時代, 「声」のわかれ — 児童資料 (日本の児童文学) —

宮川健郎

「児童図書館員養成専門講座」で「児童資料 (日本の児童文学)」を担当することになって、もう10年ほどになります。朝9時30分から、お昼休みをはさんで、夕方4時30分まで、正味6時間の長い講座ですが、日本の子どもの文学が1891年の巖谷小波『こがね丸』からはじまったと考えると、130年ほどの歴史と現在の問題をあつかうには、まったく短い時間でしかありません。歴史と現在を何とか大づかみにしなければなりません。講師としての、はじめの2、3年は試行錯誤が続き、やがて、日本の子どもの文学のもっとも大きな転換期に注目することになりました。それは、1960年前後の「童話」から「現代児童文学」へと移り変わった時期です。

昨年(2017年)2月、佐藤さとるさんが亡くなりました。日本の「現代児童文学」が成立したのは、佐藤の『だれも知らない小さな国』(講談社)などが刊行された1959年だと考えられます。

大正から昭和戦後にかけての「童話」は、詩的で象徴的なことばで心象風景を描くものでした(小川未明の「赤い蠟燭と人魚」や宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を思い出してください)。「童話」は、もっと散文的なことばで、心のなかの景色ではなく、子どもという存在の外側に広がる状況(社会)や、状況と子どもとの関係を描く「現代児童文学」へと転換します。長い戦争を経験したあとの子どもの文学

は、「戦争」も、戦争を引き起こすこともある「社会」も書かないわけにはいかなくなりました。『だれも知らない小さな国』が下じきにしているのも、戦争体験でしょう。

「童話」が幼い子どもに読んであげられるものと考えられていたのに対し、佐藤さとるは、黙読で物語を楽しむ十代の子どもを読者として意識してはいたはず。佐藤以降の「現代児童文学」は、読者層の中心を年上の子どものたちへと移動させ、読んであげる「声」とわかれて、黙読される書きことばとして緻密化していきます。そのことによって、さまざまな主題(「性」や「死」や「家庭崩壊」など)を深めることにもなったのです。

「現代児童文学」が「声」という身体性とわかれたあと、子どもに語る声は、絵本の読み聞かせや、紙芝居を演じる場、おはなし会などに偏在することになります。そして、「現代児童文学」のなかでは手薄な分野となった幼年文学をどうするか……。

こんなふうには、私は、日本の子どもの文学を「声」の時代から「声」のわかれへという変遷として語ります。

講座の受講生たちの事前の課題は、下記です。

①新美南吉の「ごん狐」および「権狐「赤い鳥に投ず」」をさがして読み、二つの作品を比較しながら、感想、意見を述べなさい。

(1200字以上)

②佐藤さとる『だれも知らない小さな国』をさがして読み、感想を書きなさい。(800字以上)

現在、すべての小学校国語教科書の4年生に掲載されている「ごん狐」は、新美南吉が雑誌『赤い鳥』に投稿して、1932年1月号にのったものです。書き出しは、「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です」。私たちは、おじいさんの語る声を聞くようなつもりで読むことになります。「ごん狐」は、「声」の時代の童話なのです。

この作品には、南吉のノートに書きとめられている「権狐「赤い鳥に投ず」」という原形があって、これは、雑誌掲載形と内容がずいぶんちがいます。『赤い鳥』を主宰していた鈴木三重吉が手を入れたものと考えられます。講座では、ふたつをくらべる話し合いをします。

『だれも知らない小さな国』が刊行された当時、それを読み聞かせた実践をとおして作品を批判したのは、石井桃子でした(「子どもから学ぶこと」『母の友』1959年12月)。受講生たちと私は、石井桃子の意見も参照しながら、読んであげる「声」とわかれた、この作品を検討していきます。(みやかわ たけお: 武蔵野大学文学部) [NDC10: 909 BSH: 児童文学-日本]

児童図書館員養成専門講座へのお誘い★5

「児童図書館員養成専門講座」

— 受講を振り返って —

子安洋子

講座受講の幸運

本講座を受講した2005（平成17）年、私は新卒時から26年間（計4校）勤務した新潟市立小学校図書館から公共図書館へ異動し、不慣れな現場で手探りの日々を過ごしていました。新潟市はこの年、近隣13市町村と合併し、人口80万人規模の新・新潟市としてスタートしました。私が配属された新潟市立沼垂図書館（現中央図書館）は、拡大した新市全体の図書館を統括する新たな業務を担っていました。また、2007（平成19）年度政令指定都市移行後に予定されていた中央図書館開館準備も着々と進められ、大きな転換点にあったと言えます。

一方、本市の図書館では、児童サービス充実のため、以前から、本講座の公費派遣を継続していました（*注）。私の担当が児童サービスだったことから、受講の機会が与えられ、未知の世界の扉を開くような期待感をもって臨んだことが、懐かしく思い出されます。

*注：1999（平成11）年度から2016（平成28）年度までに8名が受講。1999年度以前は不明。

事前課題の取り組み

申し込み時のレポート作成に始まり、各種事前課題については、睡眠時間を削って取り組みました。大変でしたが、勤務図書館の現状認識を深め図書館職員としての視野を広げる上で意義深いものでした。さらに、講座開催中は、全国の図書館の多様な現状が交換され、講師陣の指導と響き合い、実践的な学びの連続となります。

今も生きる講座の「チカラ」

児童サービスの基本理念から選書や直接的サービスの手立てまで、一流の講師の肉声を通して体系的に学べたことが、その後の業務の指針となりました。講座資料は1冊のファイルにまとめて保管し、児童サービスの各種研修講師を担当する際も参考にしてきました。

私が受講した時期は、本市ではまだ「子ども読書活動推進計画」を策定していませんでした。その後、2007年度に中央図書館が開館し、2010（平成22）年3月に第一次計画を策定しました。この計画期間の5年間で、本市の児童サービスは大きく前進しました。その主要な取り組みとして、ブックスタートの開始と学校図書館支援センターの設置や学校への団体貸出用搬送システムの導入があります。他の自治体の先行例から学び準備を進める事務局の一員として、講座で得た具体的情報も大変役に立ちました。

さらにもう一つ加えるなら、受講生同士の緩やかなつながりも宝になっています。開催期間中は、オフの時間帯に都内図書館等を一緒に見学しました。終了後もメールで情報交換を続けたり、新潟や都内図書館の見学に参集し交流の機会を持ちました。また、講座の講師や日図協の先生方から、終了後も教えていただきたいことでした。

講座に期待する

社会全体が財政難の中、図書館運営に関しても危機感をもった見直しが行われています。こうしたとき

こそ、図書館職員の真価が問われると言えます。余裕のない人員配置の現場から、長期の専門講座へ職員を派遣することは容易ではありませんが、たとえ派遣する間隔が伸びたとしても、各種専門講座で集中的に深く学ぶ機会は確保したいものです。特に、児童サービスは公共図書館サービスのベースの一つであり、保護者層の利用を広げる意味でも重要です。

また、読書や図書館活用を通して子どもの成長を支援する上で、関連機関との連携が有効と言われます。市民との協働も欠かせません。サービスの拠点が点に留まらず、課題を共有するさまざまな分野と連携し、線や面としての働きを実現できるような、図書館員の「チカラ」を育成することもより大切になると言えます。

関連機関のひとつとして、学校図書館を通して教育活動を支援する機能の充実も課題です。読み聞かせやブックトークなどの子どもと本を結び手立てとし、読む力を引き出すアニメーションやリテラチャーサークルなどの各種活動は、子どもの読書を充実させる上で、車の両輪と言われます。特に後者については、これから学んでいく必要のある領域と思います。学校職員と連携して取り組む際に役立つこの分野の基礎的な研修も、本講座に期待するところです。（こやす ようこ）

新潟市立生涯学習センター図書館
[NDC10：016.28 BSH：1. 児童図書館員
2. 研修(図書館員)]

「児童奉仕の運営・年間計画」は こんな内容です

川上博幸

公共図書館の児童室や学校図書館の運営は、どこでもたいてい同じようなものだと思われていて、一般には意識されません。図書館人であっても実態はさほど変わらないかもしません。

そこで、養成専門講座では、他の講義で扱われる専門実技面はさけて、他で扱われない雑多なことすべてが守備範囲だと心がけています。

子どもは図書館に入ってあたりを見まわし、無意識に開架空間からなにか雰囲気を感じます。配架の本とか蔵書の醸し出す、感じや親しみでしょうか。利用者にとって運営とはそんなものなのでしょう。

その状態に本の借りやすさなどの利用面、係の人のふるまいや親切心が加わります。子どもにとって利用しやすさは、建物や設備よりも来館者を迎え、こまごま面倒をみてくれる人です。ですから、ひとことのあいさつや声かけなどが必要で、日ごろの心がけがにじみます。

そこで児童奉仕以前に、どんな仕事をするにも大切なことを考える機会を持ちます。自分が何かを克服しようとするか、努めているかなど、仕事をすると図書館員を重視します。このように実際面から、子どもに届く活動を見直す機会にします。

まず、対応する人が熟知しておくべき基本知識や児童奉仕の三要件など、基礎・基本事項の確認、加えてすべての図書館活動の根底にある「人と読書の関係」を、子どもの読書の重要性として再確認します。

そして、実際に開架で子どもと本をつなぐ活動、つまり小学2年生男子と小学5年生女子の場合を想定して、具体的に3冊書名を挙げて考えていただきます。具体的な形にすることで、図書館員の本の知識と、その運用力と対話力を高めます。

また仕事上の失敗事例を振り返ります。人はうまくいかなかったことから、よりよく学べるという面があります。これを点検します。

ここまでで、時と場合により、活動や苦情、弁償事例などにおける、「憲法、法、条例、規則、内規、手引き、申し合わせなど」との関わり具合と、公務員が持つ、説明責任（アカウントビリティ）と法令順守（コンプライアンス）事項にもふれます。

ここで、業務・活動・館を取り巻く諸事情を“見える化”します。

図書館の直接業務と間接業務全般を、1年の記録として四半期ごとに記述し、業務全般のなかで児童奉仕の改善を計画化して点検します。『図書館雑誌』2013年6月号で拙述をご覧ください（p.348-350）。業務の1年間の流れを自覚し、業務や活動や働き方の精粗を知って、その平準化に取り組む共通土俵作りの試みです。児童奉仕の1年間の行事や催し物だけを記述するものではありません。収集・選択、組織化、利用、保存・管理・除籍という、基本業務の流れと、定例化した読み聞かせやお話会、業務、イベントとの均衡などを見ます。

こうして仕事の流れの安定化と円滑化を志向します。奉仕に関わる人

が業務と事情に習熟し、利用者の動向を知り、自らの学習を高め、徐々に運営力の向上を図ります。

運営の向上には、現状を熟知して、なにより現実と実情に応じた「考える力」が必要です。考えたことを企画し計画化し実行力をつけます。この考える力の養成が主眼です。

職員の問題把握力・課題解決遂行力が組み合わされて、日常の利用面に及べば、利用者は運営が改善されたと感じるでしょう。

このためには、自治体や地域社会、日本の社会で起こっていること、世の動向を視野に入れます。

他に館の課題（除架、除籍）や受講者のいま克服したい課題（〇周年、建替、移転）にも寄り添います。

「児童奉仕の運営・年間計画」の理論と実践について、これだけの内容は、9時30分から16時30分まで、大学の90分講義4コマ分の時間分があるからできることです。

受講者から講師へ、講師から受講者へ、受講者どうし、の質疑応答や意見交換があります。一つひとつの事柄の密度が濃くなりがちです。一般的に学ぶことに加えて、自分だけ個別に身につける事柄もあることでしょう。今の自分を大切に、共に語り、学びましょう。

（かわかみ ひろゆき）

JLA 児童青少年委員会）
[NDC10：015.93 BSH：児童サービス]